

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

なしむ

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

SPRING

2000



発行○平成12年3月30日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
(長崎県原爆被爆者対策課内)
Tel. 095-823-4278
Fax. 095-820-3037

第三回「永井 隆」 平和記念・長崎賞 受賞者決定!

Nagasaki Dr. Nagai Peace Memorial Prize

第三回「永井 隆」平和記念・長崎賞

「原子爆弾救護報告」英訳版出版

NASHIM's Works

1999年度
—韓国からの「招請研修」受け入れ事業— はじめてナース来崎

カザフスタン雑感 専門医師等派遣事業

Reports

在外被爆者渡日治療事業

Letter Box

「遠隔医療支援システム確立は、長崎から
セミパラチンスクへの具体的支援の第一歩」

News

外務省補助事業 電子図書作成支援と専門家交流





永井 隆
(ながいたかし)
明治41年(1908)
～昭和26年(1951)
医師、原爆作家。
鳥根県松江市生まれ。

昭和7年(1932)長崎医科大学を卒業し助手として放射線医学を専攻した。満州事変に幹部候補生として出征し、帰還してカトリックの洗礼を受け森山緑と結婚。日中戦争に重傷中尉として中国各地に転戦し昭和15年(1940)帰還した。同年、長崎医科大学助教授・物理療法科部長となるが白血病に冒され、昭和20年(1945)6月、余命3年と診断される。同年8月9日爆心地から700m離れた同大学で勤務中原爆に遭い重傷を負う。この時出血がひどく、丘の上で同僚の外科の教授から手術してもらったが、麻酔なしの手術に顔色ひとつ変えない永井博士は実に神々しい気高い姿だったという。手術後、永井博士は自ら先頭に立って多数の傷ついた人々のため救護活動に挺身した。8月9日妻・緑は自宅の下敷きとなり逃げ出されず焼死した。子供2人は三ツ山の祖母の家に疎開中だったため無事だった。

翌昭和21年教授になったが白血病で倒れ、病床で原爆の手記を執筆し始める。これを「東京タイムズ」に発表して認められ、「ロザリオの鎮」「この子を残して」「生命の河」「長崎の鐘」「花咲く丘」「いと子よ」など数々の作品を書き、折りと平和を訴え続けた。これら著作を読んだ感動した多くの人達が見舞いのため博士を訪問した。天皇陛下のお見舞いを受けローマ教皇も特使を派遣し、昭和23年にはヘレン・ケラーも訪問した。長崎市長市民第1号に選ばれ国会でも表彰を受ける。松竹映画「長崎の鐘」(昭和25年)は博士の住まいであった「知己堂」で撮影されたもので、多くの国民に感動を与えた。

昭和26年(1951)5月1日長崎大学医学部附属病院で骨髄性白血病により死去、5月14日に長崎市葬が行われた。

永井隆記念館OPEN

白血病に侵されたうえに原爆で被爆し、それでも救護医療に献身した永井隆博士は「長崎の鐘」「この子を残して」等の名著を残しました。さらに博士は少年少女のために「うちの宝箱」を開設、それを発展させ今回名称も新たに「永井隆記念館」として4月5日にオープンします。新記念館は、1階が視聴覚コーナーとグラフィックパネルや遺品等を展示しているコーナー、2階は図書室となっており、これまでの約2.7倍の広さとなります。



物理学者として放射線生物学、放射線防護学などの研究に携わり、これまで、幅広い中性子測定の実験結果の報告を行っています。



特に、1964年に発表した中性子の酸素増感比および1971年の相対的生物効果の研究は世界的に高く評価されています。



プロローセ氏はその後、中性子被曝によるラットおよびアカゲザルの発癌研究をすすめ、放射線リスクの解析を行いました。プロローセ氏は中性子のリスクと相対的生物効果を明確にした第一人者として高く評価され、氏の研究成果は原爆放射線とくに中性子の被爆者に与える影響を解析する上で貴重な資料となっています。

- 受賞者**
- 1974年 放射線生物学研究所、ライスワイク
 - 1974年 スタンフォード大学(放射線医学)、(米国)
 - 1974年 放射線生物学研究所、ライスワイク
 - 1986年 現在 ライデン大学、非常勤教授
 - 1991年 現在 放射線防護・測定センター顧問、ライデン
- 受賞**
- 1976年 デーモン・リニオン記念基金受賞
 - 1999年 ベック・アレキサンダー賞受賞

受賞者の横顔

第3回「永井隆」平和記念・長崎賞の受賞者はオランダライデン大学のヨハネス・ヤコブ・プロローセ氏に決定しました。授賞式は3月30日に長崎厚生年金会館で行われ、正賞として賞状と賞碑(フロンズ像「生命のともしび」)、副賞として賞金200万円が授与されました。

受賞者

ヨハネス・ヤコブ・プロローセ氏

プロローセ氏は、世界的に著名な放射線物理学者であり、授賞式の後、「中性子…それは本当に危険なものか？」の演題でお話をして下さいました。スライドを使つての講演に、100名近くの聴衆は熱心に耳を傾けていました。講演の後には盛大にプロローセ氏の受賞を祝福しました。

「永井隆」平和記念・長崎賞は、原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故等による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ、世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に隔年毎に贈られます。



受賞者

ヨハネスヤコブプロローセ氏(65歳)

主な経歴

- 1934年10月12日 アムステルダム(オランダ)にて生まれる。
- 1959年 アムステルダム大学(核物理専攻)卒業
- 1961～1973年 放射線生物学研究所、ライスワイク
- 1974年 スタンフォード大学(放射線医学)、(米国)
- 1974～1991年 放射線生物学研究所、ライスワイク
- 1986年 現在 ライデン大学、非常勤教授
- 1991年 現在 放射線防護・測定センター顧問、ライデン

原子爆弾救護報告 英訳版出版

NASHIMでは、永井隆博士が長崎原爆の急性期障害を如実に記載した貴重な救護報告書の英訳版を初めて出版しました。

1945年8月9日午前11時2分、原爆の落下中心地から500～800mに位置していた長崎医科大学およびその附属病院では、教職員・学生・看護婦896名、入院患者・付き添い72名を失う潰滅状態となりました。

永井博士は、自分も重傷を負いながら、また、緑婦人も原爆で失う状況の中で、献身的に救護活動を続けました。そして、原爆直後の大学の被害状態と三ツ山地区における救護活動の様子、負傷者の様子などについて克明に記したのがこの救護報告なのです。そこには科学者としての博士の一面も見ることが出来、原爆投下直後の状況が手に取るように伝わってきます。今回の英訳により、原爆の悲惨な実態が諸外国の人々にも伝わるものと期待しています。皆さんも、この機会に原著を是非お読みいただきたいと思えます。出版にあたり、快くご許可いただきました長崎大学医学部教授会に感謝申し上げますと共に、翻訳のご苦勞をいただきました郭芳村先生父子ならびに関係各位にお礼申し上げます。

NASHIM's Works

1999年度

—— 韓国からの「招請研修」受け入れ事業 ——

はじめてナース来崎



韓国からの研修は今年度からドクターとナースの組み合わせで行うことになり、ソウル赤十字病院一般外科医長李相禧(Lee Sang Heo)先生と、ハプチョン原爆被害者福祉会館看護婦鄭明淑(Jun Myoung Suk)さんが来崎、平成11年11月15日から11月30日までの2週間の研修・視察を行いました。

今回のナースの招聘は、実際に韓国の被爆者の介護に従事しているナース、あるいはその他のコメディカルスタッフに来ていただき、長崎の原爆ホームなどでの介護の実際を見ていただくとともに、日本の被爆者の方々の心情に触れて、韓国国内で療養する被爆者の介護の質的向上を図っていただくことを目的に加えたことから実現しました。

鄭さんは精力的に研修視察を行い、また、「恵の丘」、「かめだけ」両原爆ホーム、原爆検診センターなどのナースとの交流を深め、また多くの日本の被爆者の方々にも接して、きわめて印象深い研修になったこと、そして原爆による被害が50年を経て、なお多くの問題を個々の被爆者に与え続けている実態が良く理解できたと、今回の研修の成果を語っておられました。李先生も精力的に病院関係を中心に回られ、被曝による身体的障害、精神的後遺症などについて、熱心に質問をして、放射線被曝による後遺症のみならず、多くの障害の複合による現在の被爆者の苦しみを理解できたと語っておられました。また専門の消化器外科についても、大学病院第一外科のドクター達と交流、日本の医療の現状にきわめて強い印象を受けられたようです。

お二人の帰国後の活躍を期待するとともに、韓国からの招請研修を続けてきたことにより、韓国と長崎がますます近い関係となってきたことを実感しています。今年度は、もし予算と時間が許せば、一昨年のように韓国を訪問して、被爆者の方々と医療従事者の方々と交流し、韓国における被爆者の医療が少しでも進展するよう努力したいと考えています。

カザフスタン雑感

専門医師等派遣事業

長崎市原爆被爆対策部調査課 黒川 智雄

平成11年8月24日、アジアナ航空131便に乗り、空路韓国経由でカザフスタンへ向かった。日本とカザフスタンの直行空路は、唯一アジアナ航空が週一便運行しているこのルートだけ。しかも、中国の上空を飛行するため、機密保持の関係から夜間飛行となっている。見知らぬ地への期待と不安の中、カザフスタンの前首都であるアルマトイに着いたのが、夜中の1時半だった。入国手続きをすませ、夜明け前の市街地を抜けて、宿舎のOTRARホテルへ到着。ホテルの窓からは遠くに雪を抱いた峰々が連なっている。朝の凜とした空気と多くの緑と遠景の雪山を眺めながら、カザフスタンの自然の素晴らしさにしばしば疲れを癒される。

翌日は、ナシム研修生のフォローアップ事業という所期の目的のため、以前研修で来崎されたアブラエフ医師にお会いし、いろいろとお話をお伺いした。また、国立がんセンターを訪問し、第2回永井隆平和記念・長崎賞を受賞されたバルムハノフ医師とお会いしたが、カザフスタンでの産業育成には基幹となる電力の確保が急務であることを話されていた。

今回の訪問で、セミパラチンスク医科大学と長崎大学医学部間の遠隔医療診断システムの開通式という劇的な瞬間に臨み、核実験場に近いドロン村にて長崎大学原研施設の山下教授をはじめ、多くの先生方の診察にも立ち会う時を得た。ドロン村の診療所やポリショイウラジミールスカ村の病院では、お粗末な医療機械しかなく、被曝による甲状腺がんなどの診断治療は困難を極めている。医療支援の最前線を訪れて、遠隔医療診断システムが定着し活用されるためには、ひとえに現地の医師の認識と育成にかかっているのではないかと思われた。今回設置された遠隔医療診断システムが定着し、大いに活用されることを祈りたい。



Reports レポート

在外被爆者渡日治療事業



長崎県が、国及び広島県と共同で実施している在南米被爆者巡回健康診断や、広島県医師会が行っている、在北米被爆者巡回健康診断を受診された被爆者を対象に、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)では毎年、在外被爆者渡日治療を実施しています。今年度も、日本赤十字社長崎原爆病院において、平成12年3月14日より、アメリカ合衆国在住の被爆者6名の渡日治療を行いました。

今回検査治療を受けられたのは、深堀フジエさん、シズコ・ウエストさん、アン・フミコ・ホワイトさん、ミズホ・スティーブンスさん、ミュキ・ブロードウォーターさん、田中五百子さんの6名で、いずれも女性です。それぞれに、体調には不安を抱かれており、血圧、甲状腺、肝臓、心臓などの病気の検査・加療を目的としての来崎ではありますが、故里へのなつかしい思いと同時に、当時の原爆被曝の状況も思い出され、複雑な心境が察せられました。特に、深堀フジエさんは、11才で長崎で被爆された後、渡米し、以後連絡が途絶えていたため、感慨ひとしおといった様子でした。

平成11年5月の在北米被爆者健診を受診された事で長崎市と連絡が取れ、今回43年ぶりに帰国、来崎され、被爆者健康手帳の交付がなされました。約半世紀に及ぶ空白後の肉親との対面では、感無量を述べられていましたが、まだ戦争の傷あとがここにある思いです。まだみなさん、検査治療の半ばですが、少しでも、渡日治療による効果が認められる事を望むと同時に本事業の継続を期待します。

平成11年5月の在北米被爆者健診を受診された事で長崎市と連絡が取れ、今回43年ぶりに帰国、来崎され、被爆者健康手帳の交付がなされました。約半世紀に及ぶ空白後の肉親との対面では、感無量を述べられていましたが、まだ戦争の傷あとがここにある思いです。まだみなさん、検査治療の半ばですが、少しでも、渡日治療による効果が認められる事を望むと同時に本事業の継続を期待します。

Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介します。



遠隔医療支援システム確立は、長崎からセミパラチンスへの具体的支援の第一歩

在日カザフスタン共和国大使館 一等書記官
イェルラン バウダルベク・コジャタエフさん

悲しいことに、日本と私の国カザフスタンは、「ヒバク」という共通の原爆被災問題を抱えています。

私は、日本語を学び在日カザフスタン大使館に勤務していますが、そこで多くの日本人が医療を通じて、カザフスタンのヒバクシャのために尽力している姿を見てきました。すでにNASHIMは、医師の派遣、現地専門家の招聘・研修を通じてヒバクシャ医療支援を幅広く展開し、また1960年初頭のカザフ科学アカデミー調査隊による「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」報告書を邦訳し、セミパラチンスク地域の放射能汚染実態をいち早く日本に紹介しています。昨年8月の長崎大学医学部—セミパラチンスク医科大学附属病院間の遠隔医療支援システム確立は、ヒバク地長崎からセミパラチンスへの具体的支援の第一歩であり、開通式に立ち会った者の一人として、携わった多くの関係者の方々に深くお礼申し上げたいと思います。このシステムの確立は、これまでのNASHIMの継続的なセミパラチンスク支援が実を結んだ、一つの努力の「結晶」ではないかと思えます。同時にセミパラチンスク写真展を長崎で、広島・長崎原爆展を現地で開催して頂きました。今後は具体的なセミパラチンスクヒバクシャ医療協力がJICALレベルで予定されています。このプロジェクトでもNASHIMが現地のヒバクシャに密着した支援活動を続け、両国の悲しい歴史を克服し、真に平和な国際協調社会構築に寄与されることを期待しています。

Information

NASHIMのホームページが新しくなりました。

NASHIMの活動状況のほかに、永井隆平和記念・長崎賞についても見る事ができます。さらに、英語版も完成し、海外の医師・専門家がインターネットで研修の申し込みができるようになりました。

新しいホームページのアドレスは、

<http://village.infoweb.ne.jp/~nashim/jp/index.htm>

また原研国際のホームページでは放射能Q&Aを掲載していますので是非一度ご覧ください。

原研国際ホームページ

http://www.med.nagasaki-u.ac.jp/renew/information/interna_heal.j/index.html

編集後記

「なしむ」第6号では、永井隆博士の特集を組みました。「原子爆弾救護報告」の英訳版は、被爆直後の悲惨な状況と自らも重傷を負いながら被災者の救護にあたった永井博士の献身的な姿を諸外国の人々に知ってもらう貴重な1冊になるでしょう。また、「永井隆」平和記念・長崎賞の授与を通じ、博士の崇高な平和希求の精神がオランダ国でも受け継がれていくことを期待しています。

NASHIMへの期待は、国の内外を問わず大きくなっています。これからも世界のヒバクシャのために貢献していきたいと考えます。ご支援をよろしくお願いします。

News

外務省補助事業

電子図書作成支援と専門家交流

NASHIMでは平成9年度から外務省との共同事業でチェルノブイリへの医療協力を継続し、すでに現地でのロシア語医学教科書作り支援や、携帯用超音波診断装置の寄贈を行ってきました。本年度は、ベラルーシ共和国ミンスク医科大学の医学・医療情報部門を支援し、電子図書の立ち上げに協力しました。ハード面での機材供与に加え、専門家の派遣と受け入れは厳しい冬季に行われましたが、順調にその成果を挙げました。現地での困難な社会経済状況では、チェルノブイリ周辺における情報インフラ整備が最重要課題です。特に医学教育、医師再教育、新技術や最新の知識への確実なアクセス方法の確立は、この国の将来だけではなく、患者への適切、迅速な医療支援の根幹をなすものです。そこで、従来からの遠隔医療診断支援事業に加え、現在計画中のWHO-ベラルーシ-テレメディスン・プロジェクトにリンクする形で、インターネット上で見れる医学事典の編纂や教材の



作成をソフト面からも支援しました。ロシア語圏内すべての医師や医学生、医療関係従事者が機会均等に学べるハードとソフトの支援を目指しています。この事業には長崎大学医学部とNTT西日本から有形無形の多大な貢献をして頂いています。なお電子図書教材の一部は本年度の医学部原研国際客員教授ウラジミール・バーシン先生のご尽力で、カラーアトラスの教科書としても限定部数の出版が可能となりました。外務省補助事業が多面的なチェルノブイリ支援となっていることを追記させていただきます。